
お約束days

日高遊苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お約束days

【Zマーク】

Z9531E

【作者名】

日高遊苑

【あらすじ】

連載中（不定期更新です） まあまあ面白可笑しく過ごしてきました、青春時代真っ只中の俺の前に現れたのは、この町じゃ あ有名らしい『お約束ガール』こと日向あかり。常時かけている眼鏡を外すと美少女顔になり、朝遅刻する時は食パンをくわえながら走って登校してくる変な女。そんなアカリと、俺・ソラは、なんだか妙な付き合いをしていくことになり…？

プロローグ

俺は、小早川高校に通う極普通の男子生徒だ。

名前、だつて、市原空といつありきたりな姓名だ。

高校という青春時代真つ只中な男だ。

正直、運動神経にはかなりの自身がある。こぞとこう時に女を守るくらいの力はある。

顔はと言えば、普通に告白されたりする。だからと言って人気者なわけでもないが。

成績は必要最低限のラインを越えているから、まあ安心だろ。

経済的な話では、そちらの学生の間で有名だ。なんだつて、家が屋上プール付きなのだから。

たまに、それが目当てで大人数で押しかけてくるヤツらがいるけれど、出来る限り寛大な心で迎え入れてやる。

俺の苦手なものと言えば、何よりも授業。

とりあえず出てはいるが、内容を頭に収めてはいるが、とにかく面倒だし気にくわない。

特に音楽の担当、小池は口うるさい。俺を完全に敵視している。

偉そうな口振りをしているが、俺は世間から見ると『ワル』ってやつに属するんだろう。

こんな下らない言ひアペールは終わらとして、今の俺の近況を話すと、これまた長くなってしまう。

とりあえず、今俺の目の前で俺に微笑みかけている女子高生……曰ひや
向あかり、

この女との始まりから語ることになると困る。

プロローグ（後書き）

アドバイス等あつましたらコメントお願いします。

昇降口での衝突事故（出会い）

まず、時は3日前の放課後に遡る。

俺はいつものように早足で教室を後にした。

一見チャラチャラした雰囲気を醸し出して居るよう見えるが、決してそんなキャラではない。

秀才でもなければ、バカでもない。ただ自由気ままに過ぎしてきた。だから、周りに迷惑と不快感だけ掛けてる下らない連中とは滅多なことじやあ連まない。

早く家に帰つて昼寝して、晩飯喰つて寝よつ……

そんな単調な生活を繰り返すだけの日々を送つていた。

単調な繰り返し、それこそが俺には安心感があつて、居心地が良かつた。

だから、それを変えようとなんて考えたことはないし、変えたくないが為に部活はせず、彼女も作らない。バイトも興味がない。

俺は今まで、そしてこれからもずっとこの調子で過ごしていく。

そんな矢先に起きた出来事は……まさに、その調子を狂わす、俺にとっての悲劇的大事件となつたのだった。

「あやつー。」

俺が靴を履いて昇降口を出た……丁度、なんて絶妙なタイミングなんだろうと感嘆してしまいそつなくらいタイミング良く、俺よりかなり背の低い女子が俺の胸板にぶつかって来た。

「ひでえ……、てめえ突つ走つてくんじゃ」「いたたあ…。ふ、ふえ！？」め、眼鏡が…」「

俺の文句も言い終わらないうちに、その女子生徒は俯いたままじろぎ始めた。

そいつは掛けていたらしい眼鏡を探していた。その眼鏡はそいつと、物の見事に2メートルほど遠くに吹っ飛んでいた。

『なんなんだこいつ、昔のマンガのヒロインかよ』

そんな光景に吹き出しそうになるのを堪えながら、仕方なく眼鏡を拾つて渡してやる。「ほら」

そいつは、俺の正体が見えないからだろうが、慌てふためきながら「あ、ありがとうございます」と言つて受け取つた。

顔をあげたそいつを見て、目を丸くしてしまつた。

『…なんだこいつ』

咄嗟に思つたのはその一言だった。

あまりに衝撃的すぎて、身に付いている筈の語力が皆無になってしまった。

そいつは俺の思考を一時シャットアウトさせた。

……要するに、滅多に惚れない体質の俺から見てもとても可愛い顔をしていたのだった。

なんとなく見覚えのあるような、そりでもないような感じのそいつは、「ふあ～、見える見えるっ」

……多少なり危ない顔をしながらそつまつて、俺の方を向き直った。

「あらがとうございました。えっと…、同じクラスの市原君、ですよね？」

なんだ、こいつ俺のクラスか。…そんなり程度の記憶すらない。

ちなみに言うと、俺は人の名前やら顔を覚えるのは大の苦手だ。

だから別段興味なさ気に「おお。俺はお前を知らないけどな。じゃあ」と片手を上げ、別れの意を示した。

俺はこの出来事を穏便に終わらせるべく、長話はしないで早く帰ろうと思つた。

だがそりはいかないのが今回の事件だった。

「あの！一緒に帰りませんか？ていうか、帰りましょう！私、急いで忘れ物取つて来ますからー！」

なんとそいつは、そつまつなり校舎内に向かつて駆けだしていったのだった。

唚然とした俺はその場から動けず、そいつを待つ形になってしまった。

「すみませんでしたー！じゃあ、行きましょうー」そして30秒足らずで戻つて来、走りながらそつ叫んだ。

周りからの視線が俺たちに集まる。

俺は多少たじろいだが、そいつは半ば強引に俺の手を引っ張つて校門に突き進んでいった。

ちゅつと待て。 なんで俺は見ず知らず（？）の女と手を繋いで歩いてるんだ。

門を出た辺りで、俺はせつとのいで口を開いた。

「あ、名前まだ言つてませんでしたね。あたし、田向あかりってい

います」

誰も聞いてねえよ。てこつか質問に答えやがれ。

「一緒にクラスだけど…たぶん市原君、人の顔覚えてないですね。はじめまして」

なんで、そんな個人的な事までよく知ってるんだよ。

心底そんな悪態をつきながら、渋々俺も名乗つをあげた。

「市原君。ようじく「ようじくしたくないのが本音だが。

「んで。俺のくじけないんだけ、帰るの」

「市原君はなんでそんなに毎日急いで帰るんですか?」

いやいや、人の話聞けよ。

「別に。特にやるこないし、寝てえし」

なんだかどうでも良くなつてきたので、適当に話を受け流しながら一緒に帰ることにした。

あかりは、無愛想な俺の返答にも嬉しそうに笑つたりした。

自分の話をちゃんと聞いているのか聞いていないのかも分からない俺に、ちょっとした、本当にちょっとした愚痴を零しては同意を求めたりもした。

俺は意識を向けて答えていたものだから、内容はよく覚えてい

ない。

そんな感じで、あかりの一日田の奇襲は終わっていった。

……もう気づいただろ？が、俺が何かと誘われるのは一回なんかじやなかつたのだ。

「市原君っ！」まずは翌日の朝のH.R.中。

なんと俺の後ろの席だったあかりは、俺の方を静かに叩いて「今日も一緒に帰りましょ？」「と黙りてきたのだった。

無論俺はイヤだと答えた。

これも予想がつくだろうが、勿論あかりは、そんな事聞こえていませんとも主張するかのように見事にスルーし始めた。

そして、帰りを誘つだけなら良いくじして。百歩譲つて良いくじして。

「市原君！一緒に教室移動行きましょ？」

なにが魂胆なのか、下校時以外にも頻繁に俺につきまとわり始めたのだった。

「……あのな、お前や。一応お前女子なんだかい。おトモダチと一緒にいた方が良いんじゃねえの？」

たまりかねた俺はそう言つてやつた。

けど、あかりは微笑みながり言つた。

「何言つてるんですか～、市原君だつてお友達じゃないですか」

……。

……イヤ、やつこいつ意味じやなくてだな。

「お前、もしかしてオトコ好き？」

からかいを含んだ言い方をしたのだったが、自分で言つていて何か違つ事を言つたと思つた。

あかりはまたしても微笑みながら「男の子も女の子もみんな好きですよ」と言つた。

……おがつぞ俺。」こつはオトコ好きとか、やつこいつ問題じやない。

「お前や……」

俺は、頭にクエスチョンマークを浮かべっぱなしのあかりに溜息を

ついた。

…… ここへ、完膚無きまでの天然女だ……

呆れた溜息が出たと同じ瞬間、あかりは俺に言った。

「じゃあ、行きましょうか！」

昇降口での衝突事故（出雲二）（後書き）

アドバイス等あつましたらコメントお願ひします。

3回目になつての異変

「お前、本当に物好きなんだな」

だんだんあかりの態度に慣れてきた俺は、3回目の下校前のH.R.で
言つてやつた。

やつぱりあかりは「市原君は物じやないでしょっし~」と言つて微笑
んだ。

『いや、やうこいつの意味での答えが欲しいんじゃねえんだけど……』

こんな感じの会話しかしないが、なんだか生活が充実している気が
する。

俺つて前まで相當寂しい奴だったんじゃねえか？

そんな疑問すら抱けてくる。むしろ以前の俺に泣けてくる。

「…………以上でH.R.終わるだー。じゃあ、ちやんと掃除して帰れよ
ー！」

担任教師が教室から出て行くと、掃除や下校のために生徒が立ち上
がつた。

言つまでもなく俺も立ち上がり扉へ進む。

「あつ、待つて！」

女声に呼び止められ肩に触れられたので、俺はあかりなのだと思つて振り返つた。

……ちなみに、以前の俺は女子との会話を拒んでいたから普通はシカトしていた……

だがそこに居たのは、正直苦手な長崎文音ながさきあやねとその仲間二人だった。

『やべえ、見え合ひつけられた』

女子嫌いな俺は、化粧が濃く香水の香りのきついそいつらとは関わりたくないの、そのままスルーして出て行こうとした。

この学校のそういう種族の女子たちと関わると口クな事がないと、周りの男子を見て学んだ。

扉をくぐれりとしだが、文音はずかずか俺の肩を強く掴んだ。

「待つてよ窓。話あるんだけど」

「俺はないんだけど。昼寝しなきゃいけないから離して？ついでに、軽々しく名前で呼ばないで」

いつものように冷たく言い放つた。しかし、文音たちは「キャーー」と叫んで頬を染めたようだつた。

『へへへ……』

自分で言つのも憚れるが、俺は何気に女子に好かれてる方だと思つ。

いや、ナルシストとか言ひ話じゃなくて。眞面目に。

年上の友達に、合コンの女呼び込みに使われたりするし。

でも、そんな中には勿論俺好みの女はない。

俺が好きなのはこう…………純情で、ふわふわしたオーラを放つ可愛らしい子であつて。

正直、俺は冷徹な言葉しか口に出さないからそんな子とは釣り合わないとは思うが。

しかし決してこんな、いかにもな雰囲気の女子ではなくて。

……ていうか、お前ら顔近いんですけど。

女子の一人・椎橋柚木しごはしゆうすが俺に向かつてまじまじと言つた。

「空つてさー、最近あかりと仲良いよねー」

あかりは確かに、文音たちと正反対の子たちのグループだったと思う。

ということは今から言われるのは、あいつに対しての皮肉か嫌味か何かなんだろう。

悪趣味だな、と呆れた眼差しで一瞥した。

てこうか、別段俺はあかりと仲良くしてこないつもりはないんだが。

「お前らにほ関係ねえし」

「つれないなあつ、付き合ひてるんじやないの？」

柚木は、男子の間で人気な、自慢の大きな目を一やつかせながら言った。

もう一人の女子・小野寺早紀乃は「えへ！？んなワケないでしょ！釣り合わないって、顔的に！…」と高笑いした。

「やつぱ～？しかもあいつ、今時あの眼鏡はないよね！」

「そうそう。て、こうかチビだし頭の中もお子サマだし。みんなに敬語使うとか、どこのマンガのキャラだつーの！」

「やめてその話題出さないで！思い出すだけで笑えてくるから…」

しばらくそんな会話が続いたが、俺は段々腹が立ってきた。

耐えられなくなつた俺は、行く手を阻んでいた早紀乃を軽く突き飛ばして早歩きで出て行つた。

「^{いた}痛あー…ちよつ、空ー。」

後ろから戸惑い混じりの怒声が聞こえ、すれ違つ奴らに盗み見され、睨み付けながら結果的には大人しく引いてやつたのだった。

なんなんだ、あいつらは。

わざわざ俺のところに来て、あいつの悪口だけ馬鹿^{あか}テカい声で言いふらしやがって。

あいつ何もしてねえじゃねえか。

帰路についた俺は、そんな事を考えながら怒りで胸がいつぱいだつた。

『…あいつだつて』

文音たちとあかりの顔を思い浮かべ比較する。

俺的には、文音たちよりあかりの方がシンプルで好きだ。

…いや、変な意味の、好き、じゃなく。

『確かに敬語キャラは珍種だけど、性格は良いヤツだし、眼鏡取つたら…』

…待て、俺。何考てるんだ?その思考は停止しき。

なんで一人で帰る時くらい自由な考え方をしないんだ。

俺は一人で頭を押さえながら歩いた。

周りから見たら相当危険な高校生だったことだらう。

そんな俺に、優しい声が降りかかった。

「市原君。何で頭抱えてるんですか？」

俺は、聞き覚えた声に、敢えて振り向かない。

振り向きたくなかったからじゃない。顔を見たくなったんじやない。

あつと、顔を見られたくないんだと思つ。

日向あかり。

俺はびっくりして頭をやられてしまったらしい。

3回目になつての異変（後書き）

おやじりへ、お約束の出現はこれからにならぬと申します。
アドバイス等あつましたら「メントをお願いします^ - ^ /

俺的ハプニング

「市原君、何も言わずに出て行つちやうなんて、無愛想だつて噂は本当だつたんですね」

そんな台詞を言いながら、あかりは俺に向かつて明るい笑顔を見ている。

やんわりしたその表情は、きっと誰もの心を緩められる力があるんだろう。

俺は思わず肩の力を抜いた。

「無愛想つて…余計な世話だけどな」

居たたまれなくなつたので顔を背けて言い捨て、そのまま歩き出す。

あかりは「あ、待つてくださいー」と追いかけて来る。

背後にほんわかとした気配を感じる。

足取りが余程軽いのか、あかりの足音はあまり聞こえない。

しかし確實に俺に追いつくと早足で歩いている。

そんなあかりの姿を想像していると、何故か笑みがこぼれた。

「市原君? 笑つてるんですか?」

俺が笑つたのが意外だつたらじへ、いつもよりやや高めの聲音で
かりは尋ねてくる。

「なんでもねえよ」

「なんでもなくないです。笑つてると」ひーは、初めて見ましたー。」

「「つるせこお前。別に笑つてないよ」

「笑つてます笑つてますっ！」

「笑つてないつて言つてるじやん」

「嘘ばつかり～。しつかり笑つてますっ！」

会話とまではいかないやりとりを繰り返し、繰り返し。

俺は多分この2、3日で、この雰囲気に慣れてきたんだろ、

あかりがついてくるのが当たり前に感じる。

いつでも笑顔を絶やさないあかりは、何故か暖かく思えた。

「市原君は、笑つてる顔が可愛らしいんですね」

俺はピタリと止まる。隣を歩いていたあかりも立ち止まつた。

『可愛らしきつて……。俺に向ける言葉かよ、それ』

俺はもはや、笑みを隠そつとはしなかった。

「え…っ。やっぱり、男の子は可愛いって言われるのは傷つくものですかっ！？
け、軽率ですみません！」

笑むどころか最終的に吹き出す始末だった。

『久々だな、笑ったの』

別に大して面白い訳ではなかつたが、あかりの戸惑い具合に笑つた。

特に何もなかつた日々。変に付きまとつ奴が現れたこの頃。

日向あかり。こいつが、俺の生活を変えた…のかも知れない。

「市原君、あの…」

れつきの表情のまま「んあ？」と情けない返事をする。

あかりは俺の前に歩み寄つて来て、手をヒラヒラさせて俺を近づけさせた。

なんだか必死な顔色だ。

なんなんだ、と思いながら呼ばれるがままに近づく。

と、その瞬間。

ちゅつ、という極ありきたりな効果音を出し、俺の唇に何かが触れた。

気のせいなのだろうか、それとも事実そんなことが起こったのか定かではないが、

俺は確かに今、間近にこの田で見た。

現在ただ呆けている俺の目には、あかりの仄めかしいピンクの唇が映り、

そしてその他にも、子供がよく持つマシュマロのような頬、艶やかで日本人女性を思わせる黒髪、

そしてなにより眼鏡越しの長い睫毛。まつげ

化粧なんて全く必要としないその美貌は、知った日には大勢の男共が押しかけてくることだろう。

……そんなこんなで俺の頭の中はイカれてしまい、何が起こうとしているのかは察しの通りだが、もう俺は周りの住民や生徒のことなんて考えられなくなってしまった。

誰かが居たのか居なかつたのかも分からぬ。

口元が熱いような気がする。

『……ここ……三つ編み結つてたんだ……』

場違いな考え方だが、さすが本場の眼鏡っ子だと感心してしまつほどだ。

言つまでもなくセーラー服着用のあかりは、80年代スターを思わせる。

そんな感じで俺の思考はだんだん変な方向へ逸れていった。

たまたま落ちていった視線はと言つて、あかりの足下を捉えたのだった。

ローファーを履いたあかりは、俺の身長に少しでも近づいてと一生

懸命つま先立ちをしていた。

よくよく考えれば分かることだったのだが、俺とあかりの身長差は、少なく見積もっても30センチはある。

身長が大きいことでも有名の俺と、チビで華奢だと有名なあかり。

俺が下に引っ張られてることを含めていても、相当な無理をしているに違いない。

『つま先立ちでキスって……お子様って言われるのは無理ないかもな……』

そこまで考えが及び、やつとのことで俺は我に返った。

『きつ……キス……？』

え。なんだ。なんでも俺下に引っ張り貰へんの？

なんでここにこんなに近距離で居るわけ？

「…………。ちょっと待て」

さすがに内心驚きを隠せない俺は焦った。

あかりは未だ恍惚とした顔で顔を赤く染めている。

「……ふわあ、馬鹿にはしないで欲しいんですけど、私今のファーストキスだつたんですよ」

状況把握も困難になりつつある俺は「はあ……」と、上司の愚痴でも聞いている部下のような態度になる。

「……そう言えば俺も彼女なんて作らなかつたから、これはファーストキスになる。」

愛しすぎてたまらない女なら彼女にしそうとするし、彼女でもない女とキスするほど俺は薄っぺらじやない。

これでも一応紳士のつもりでいるのが俺・市原空と/or/う人間だ。

俺はあかりに尋ねてみた。

「今のキスって……なんで、唐突に」

少し間を置いた後に、あかりは少し照れたようににかんぐみせた。

「ファーストキスは意味とか言いますけど、私はシトラスみたいな

スッキリした感じでしたよー!」

「……誰も「ファーストキスのお味は?」なんて質問してねえよ
!!

シンドレラへの道1

そして俺は我に返つたのは良いものの、あかり曰くシトラス味のフーストキッスとやらの所為で、暫くは身動きをとるのもままならないのだった。

「市原君？市原君～？」

あかりが呼んでいる気がするが、なんだかどうでも良いくつらを感じだ。

俺は呆然としながら歩き出し、先ほどのあかりの顔を思い浮かべながら一人で帰つて行つた。

あかりは必死で俺を追いかけてきていたようだが、途中で小さな悲鳴が聞こえ、それと共に他の女子の声が聞こえてきた。

“ あやつ！ ”

“ あかりっ、大丈夫！？ ”

“ い…いたたあ…
お尻打ちましたあ… ”

“ あんた大丈夫？今日はなんで「ケたの？ ”

“ え…とですね… ”

しばらく間が空く。

後ろの空間で苦笑いが聞こえた。

“これで口ケましたワケです……”

まあ俺は見ずとも分かつていたのだが。

言わずもがな、あかりはバナナの皮で見事な滑りを繰り広げていたのであつた。

俺がさり気なくその瞬間を見てみたかったといつのは、とりあえず口に出来なこでおぐ。

つこで元気つと、『なんでここバナナの皮が落ちてるんだよ！』
とこりしき口///も。

Jの口からのあかりの行動で、俺は喜怒哀楽な表情を最大限に活かれやるを得なくなつていった。

翌日。

まず、登校中の俺の耳に、ある噂、が届いた。

「ソラ一はよー。」

歩いている俺を少し追い越して挨拶してきたのは、わざわざしていて俺が好んでる仲間・沖田京祐だ。

「つまよ、京ちゃん」

「京ちゃん、ところは、京祐の腹違いの妹が“京ちゃんへ大しゅわー”と呼びながらじょつちゅつ抱きついているからそれをマネしているのだ。

京祐の家庭の事情は結構なドロドロまだが、義理の妹の態度にはまんざりでもないらしい本人。ロリコンか。

まあ、京祐が妹（本名：沖田由依夏）を“ゆつせん”と語尾にハートマークを付けて呼び、その上おで口やらホップにチューしまくつて、いるところの事実には敢えて触れないでおこう。

とまあ、その京ちゃんだが、なんだかにじにじしながら俺を物色してくるので、

「なんだよ京ちゃん。俺がそんなに可笑しい?」

「こっやあ、別に?」あからさまに返つて笑える。

「なんだよ、言えよ」俺が焦れったそつこいつとい、京は尙のこといヤついた。

「ソラ、お前、日向と一緒に毎日帰つてるんだよな？」

やつぱり尊られるのが、と半ば呆れながら溜息混じりに「やつだけ
ど」と呟つ。

「それが。何かあんのかよ」

京はすかとす答える。

「ソラ知らない？日向の噂つてか、一いつ切」

俺は思わず吹き出しちゃなつた。「一いつ切？なんだそのファン
タジック的なヤツ」

思いの外京は真面目に言つていたらしく、ふてくされたような顔で
続ける。

「なんだよ、だってみんな言つてるぜ？」

“日向あかりは、まさにそんな感じだな”って

「だから、何なんだよ」

いい加減もつたいふりすぎだ。

「あいつな、日向。すつじこ【お約束】ぶりだり？」

だからみんなから【お約束ガール・日向あかり】って呼ばれてやが
んの」

ああ、なるほど。

まあ、そんな印象だった。

地面に突如バナナの皮が出現したことで確信していた。

たぶんあれは天然少女なんかじゃがない。ありきたり、ありきたり。

ありきたりを通り越してもはや、お約束、なわけだ。

マンガのヒロインにしばしば使われる、あのキャラだ。

…………古こーとこうしちコハシは考へないものとする。

「まあちなみに言つとだな、お前はそのお約束ガールのボーイフレンドつちゅうわけだ」

「なんでそりなるー」

俺が勢いよく振り返ったので、京は驚いて後退した。

そして、その瞬間に足を踏み外した。

まるでマトリックスの撮影現場であるかのよつなその舞いつぱりに見とれてしまったが、

……まあ、それどひではなかる。

「うわあー！」

急いで腕を引っ張ろうと思つたが、あまりにも距離が遠すぎて間に合わなかつた。

やばいと思ったのもつかの間、京の下には人影が現れた。

「ふざやつ」

あかりだつた。

「いつたたたあ……。あ、危ない危ない！階段じゃふざけてりやい
けません、沖田君ー！」

頬を可愛らしく膨らませながらあかりは注意した。

そのあどけない顔つきは、まさか今の救世主があかり本人だとは到底思えない程のものだ。

氣迫の無さにむしろ圧倒される。

たぶん、この光景をマンガやアニメにすると、彼女の鼻先には蒸気のマークが浮かんで「ことだり」。

心なしか、怒つていて鼻息が荒い。

「まあ、まあ。ありがとうアカリちゃん。助かつたよ

「…えへへえ、どういたしまして」

恥ずかしそうに京に向かつてはにかむあかり。

……いや、はにかむ前に。

俺は、この高さから落ちた京ちゃんを受け止めたのにダメージを感じないお前が怖いんだが？

優に10段はある階段だ。

京ちゃんは女子高生の注目を集めそうな感じの肉体美。

この女……あかり、一体どれだけの力があるんだか。

ふと、そんなあかりと視線が交わされる。

『おをおつ？！』

つと、逃げ出すまもなくお約束ガールとの一日が始まるのであった。

いや、ここから俺の性根がイカれるなんて、思いもよらなかつたんだが。

シンクトレーラへの道2

俺があかりと出逢つてから、まあ大体2週間ほど経つた頃。

俺の中で、何か革命が起きつた。

「市原君〜！」

とまあこんな感じであかりが登場するわけで。

「おひ〜」

俺もまあまあ今まで通りに「反応をするわけだ。

「一緒に食堂行こましょ'ひ〜」

「…」

そして俺たちは一階の食堂に降り、あかりのお気に入りの席をとつて、

俺は肉がたつぱりのスタミナ定食、あかりはサンドイッチを持つてくる。

この間にする会話は、前と比較すると著しく盛り上がりを見せていることだ。

俺は受動的じゃなく、自分からもまあまあ話しかけるようになった。

あかりに興味を持ち始めたとかいう訳ではない、単に好みのものの話をされるとなつてしまつたチだつたのだ。

だから少しばら楽しく席に着き、俺は割り箸を割る。

あかりは三々箸とやらを持参し、テーブルの上に置く。

そして昼食が始まる。

最近になると俺たちを物色する者も減り始めていて、若干気楽になつてきた。

周りは俺たちを気にかけ、この席を空けておいてしてくれる。

なんとまあ、良い心遣いなことだらう。

京祐曰く、俺田辺の後輩がいるとかで、その子らがキープしてくれているらしい。

…あかりの分もセッテされているのは謎だが。

話を戻すとしよう。

問題はここからだつた。

「市原君、あ～ん」

……待て待て待て。

「……」のところ俺の悩みを作っているのは、他でもない「」の行為だ。
あかりが何のつもりでやっているのかは知れないが、とりあえず俺
が困っているのは確かだ。

この声を聞いた時ばかりは周りの生徒たちも振り返る。

「始まつた！」と言わんばかりの輝かしい瞳で俺たちを見つめてく
る。

俺は……無論無視する。

「市原君っ、その定食じゃ野菜不足ですよ！私のレタスあげますか
」

……と、いう理由だそうだ。

あえてサンドイッチの田に箸を持参するのはこのためだ。

俺はやや動搖するが、まあそんな素振りは見せない。

「いいよ、お前喰いなよ」

あかりは引き下がらない。

「駄目です、健全な男子高生がそんな栄養しか摂っていないなんて……」

食堂のおばさんが許しても私は認めません!食べなさい、市原君ー。」

俺はなんでこいつと飯を食いに来ているんだ。

口ひるめやこだけなのに、慣れだけではない何かに足を引っ張られて来てしまってこる。

多分、この間の事件のせいなんだろ?。

俺はあかりの箸を避けながら、ぱつぱつとこいつ彼女の唇を見つめていた。

決して変態やうりではないが、あかりの唇は形がいいと思ひつ。

俺も一応は男なので、女に全くの無関心…とこいつ訳でも、興味が湧かない訳でもない。

昔は好きな子もちゃんといたし、今は単純に気分にならなだけだから、「あれとキスしたのか~」なんて思つてると、不意に

「ふ

俺の口にあかりのレタスが炸裂した。

正直このレタス、朝からドレッシングに浸つてたものだから萎え気味だ。

はつきり述べると、かなり不味い。

「……」

やつとのことで口に入ったのが嬉しかつたらしくあかりは満面の笑みなので、俺は仕方なく不味いレタスを噛んで飲み込む。

……俺は野菜が嫌いだ。

「…不味い」

ぼそつと聞こえない程度に呟いたつもりが丸聞こえだつたらしい、あかりが野菜について語り始めた。

「野菜は本当に大切なんですよー・ビタミン源なんですから!」

最近の高校生は好き嫌いが激しいですから、あんまり摂っていない人も多いですけど。

野菜を摂らないとまず体の調子が整いませんし、口内炎や肌荒れにもつながります。

私なんか毎日サラダ食べますよ、にんじんもピーマンも嫌いなのに！」

力説するあかりだが、好き嫌いが多いのはこいつも一緒だ。

トマトやキュウリは食べられるものの、子供がよく残す人参、ピー、マン、きのこ、ネギは大の苦手らしい。

あつと今はお手本になりたいとかいう一心なのだろう、俺は、あかりはヤセ我慢しているとみた。

「はいはい、分かったけど。お前もいいから食えよ、ただでさえ無駄に細いんだから」

あかりは標準体型よりやや細身だ。

女子たちから見たら「スレンダー」そのものなのだろうが、俺からみたら、もうちょっと肉付きがよくても良いくらいだ。

「わかりました、食べますよ~」

そして最近反抗期なあかり。

俺に対しても若干対抗したがる。

本来この年頃の女は大抵がそんなものなんだろうナビ。

「でも、まずは市原君からとこいつ事でーあーん」

……やめて欲しい。

とどのつまづ、俺の言いたいことば。

最近の俺は、あかりに流れっぱなしである。

同じ箸でモノを口にしているのだから間接キスもしてるわけだし、それに対してもさほど抵抗もしていない。

周りからしたら付き合っているようにも見えるだらうけれど、俺はそんなつもりはない。

でも、抵抗がないのだから、俺はあかりと付き合つこと自体に抵抗がないのかも知れない。

そういうば、最近の反抗するあかりを少しかいたいような気がしないでもない。

この間のキスも不快じやなかつた。

結論。

俺はあかりが、多少なりとも好きになりつつあるのかも知れない。

シンポジウムへの道2（後書き）

コメント・アドバイスおねがいしますー。

シンセトラへの道③

その日の俺は、具合が悪くなつたので医務室で寝ていた。

具合が悪かつたというより、気分が悪かつた。

もつと言えば、だるかつた、面倒くさかつた。

……つまつサボりだつた。

そんなサボりの俺に職員が言つ。

「今授業ついていくからつて調子のるなよ。

そのつは困つたことになつても知らないからな?

本気出し始めるなら今のつちだぞ

「つむはーよ、ほつとナ」

不機嫌そつに返事をしてそのまま寝返りをつつ。

そつは俺のことをまあまあ理解している担任・田村だったので、大人しく引き下がつてくれた。

田村が出て行つたのを確認して安心すると、俺はほつと一息ついた。

医務室には俺一人。養護担当は今日、出張の日だ。

俺は『今日は一日中サボれるな』なんて考えながら深く眠りに落ちてゆく。

夢の中では、何かと幸せなことばかり起きていた。

親父はいつものように口にする教訓を全く言わないし、母親はやらうと構つじともない。

学校に行くと何故か職員がいない。

生徒は好き勝手やつてこるけれど、俺が不快に思つことは何もしない。

いつもは排気ガス臭い教室も、今日は少しフローラルな香りがする。そんな中俺は医務室に向かつ。

医務室には、やはり養護担任はいない。俺は病人用のベッドに横たわる。

心地よい眠りにつく。

しばりくじり、ノック音が聞こえる。

俺が反応する間もなく、人影が現れる。

その人影は微笑みながら、俺に徐々に近づく。

俺はその人物を知っているのか、スキだらけのままだ。

そんな無防備な俺に、そいつはだんだんと近づき、ベッドに座つて俺を眺める。

俺は寝ぼけたままのか知らないが、体が動かない。

そいつは俺の額を撫で、頬を触り、だんだん距離が近づく

そこで夢はぱつつりと途絶えた。

その代わりに俺に残つたのは、やたらリアルな夢の面影。

じばりく声も出ない。

「…………」

「…………？」

相手も微笑んだまま首を傾げる。

「…………」

…………… つね前、近いつー！

俺はやつひとのことで体を起して飛び退く。

いや、飛び退くと言つてもベッドの上なので少し後退しただけだ。

だが後退したにも関わらず顔が近い。

「どうしました？熱あるんですか？」

…………… いい加減にして欲しいくらい、今日はあかりが妙に詰め寄つてくる。

「…………お前、授業は？」

怪訝そうな顔をしながら、突如現れたあかりに俺は尋ねる。

「 もう授業、終わりましたよ。今は放課後だから迎えに来ました

ああ、そつか。俺はそのまま降りようとする。

足を床にのばす。

足が届かない。

降りたい。

降りたいんだが。

……降りれなかつた。

あかりが邪魔をしてくるのである。

「…俺、帰るんだけど」

「熱あるんじゃないんですか?」

サボつててるのを熱の所為だと思つていいらしい、帰るのを許せないあかり。

いや、熱ないんだけど。てゆうか、具合悪くないんだけど。サボりですけど。

そう言いたいが、あかりが突然俺を押し倒して來た。

妙な誤解だけはしないでいただきたいので敢えて説明するが、変な意味ではなく、単に寝てろといつ意味らしい。

見下す形になり、やたらと大きいあかりの眼鏡は落とした。

顔に直撃したが俺は払いのけず、あかりと真つ正面に向き合つ。

「いいですから、市原君は寝てなさい!」

あかりはベッドから降つると、ベッドのすぐ傍にイスを置いてそこに座つた。

「……お前、帰らないの？」

「何言ひてるんですか？市原君と一緒に帰るんですから、私は具合が良くなるまでここにいますよ」

そうひつしながり言ひて、あかりは懐からりんごを一つ取り出した。

『何故りんごが懐に！？』

その疑問は胸に秘めておひつ。

俺は、りんごに続いて懐から出でてくる折りたたみ式ペティナイフを眺めながら、本当に不思議な奴だなとしみじみ思ひ。

「まひ、りんご剥けましたよ」

別に病人なわけではないのにウサギリンゴが剥かれている。

なんだか複雑な心境だが、ありがたく頂く。

あかりが剥いたウサギリンゴは形がきれいだった。

切り慣れていたようだつたし、せつといつてつた事は器用なんだつ。

俺はその可愛らしきウサギを一口で食べる。

「お前や、俺なんかと連んでて、誰にも何も言われないわけ？」

「何かひで言えれば… 例えば？」

「例えば、ほら… 馬鹿が移るとか

「冗談で言つたつもりだったが、大真面目に受け取つてしまつたあたりは真剣に考え始めた。

「市原君は馬鹿じやないですよ。良いことひだつて沢山ありますよ。例えば…」

そんなあかりを見ながら苦笑いする俺。

悩ましいその表情を見ていると、心なしか胸が痛い。

なんだか、惨めな俺。

「変に騒がないでクールにしてるのは魅力だと思います」

やつとのことで捻りだしたらしくその一言は、実に間が長かった。

「へえ…」

「それに、頭も良いらしいですしお

「…………」

「それに、なんだかんだ言つて、一緒に帰つてくれますし」

「…………」

「それ」「…………市原君は、全体的にかっこいいと思います」

「…………は？」

一瞬頭の中がフリーズしたがすぐに回復し、間の抜けた返事をする。
俺は眉間に皺を寄せたままあかりを凝視、あかりは大真面目な顔で俺を見つめ返していた。

「かっこいい、って。そういう話してねえ……」「私は」言い終わらないうちにあかりが声を張り上げる。

「私は、市原君の顔も、市原君の体格も、中身も全つ部ひつくるめて、市原君が好きです」

“全部ひつくるめて、市原君が好きです”

「勝手なこと言つてんじやねえよ」

俺の意識とは無関係に、俺の口が動き始めた。

俺は内心焦りながら、その無意識の俺に従つ。

「熱もねえのに長い間医務室残らされて、いきなり長所の無さを思い知られた挙げ句、今度は勝手に告白かよ」

ベッドの上で壁に寄りかかっていた俺は背を浮かし、あかりの細い腕を掴んで引っ張り上げた。

「ふえ！？」

あかりは驚いて手を引っ込めようとするも、俺の力には勝てずにベッドに乗り上がる。

俺はそのままあかりに跨り、悪どい微笑を浮かべながら囁く。

「はつ。こんな力ねえくせして、俺なんかと一人で布団ある部屋に残るなんて、いい度胸してんじやねえか」

「あ……つ……」

何か言いたげなあかりだが、何も喋らせない。

上気してこりのよつなそいつの赤い頬を、男っぽいゴシゴシした手で撫でる。

あかりの首筋から心地よい香りがしてきて、さつきの匂いはここに
のせいだったのか、と今頃理解する。

思わず目を細める。

「は、放してください…」

さすがにあかりも普通（ではないかも知れないが）の女子高生な
で怖かったのか、少し震える声で俺に言つてくる。

眼鏡をしていないあかりは、やつぱり可愛かった。

三つ編みに結つた艶やかな髪は俺の手荒さのせいで乱れていて、そ
れとなく色っぽい気がしないでもない。

着崩れたセーラー服が何だか危なつかしくて、健全な男ならたまら
ないことだろう。

俺は例の唇に見とれ、吸い込まれるように自分のそれも重ね、そし
てあかりの口内に自分の舌を潜り込ませる。

「ふつー?」

口が塞がっていて上手く声が出せずにいるが、あかりはパニク状
態の中で声を上げた。

「んんーつ…………んんむう」

気持ち悪がっているのか、それともただ単に混乱しているのか、なんとなべ田の焦点が上手く合っていないらしい。

あかりは向のこと焦つていた。

「ん～～～～～！」

一度離れ、暴れるあかりを収めるよつて呟く。

「う、お前、つるやー」

勝手に行動する自分を抑えよつとする俺がどこかにいるが、敵わない。

そんな風に引きずられたまま一番圧倒されているのは、他でもない俺なのだ。

一度廊が離れたが、何もないと虚無感がして、また勝手に動き始める。

そして。

あかりとの距離がなくなり、再び深く潜り込ませよつとした瞬間。

「つ痛いーーー！」

あかりの歯にて不意に攻撃を仕掛けられたのであった。

「いつ……つー馬鹿か、キスしてゐる時に本氣で舌噛む奴いるか！？
少女マンガじやあるまいし！」

「すつ、すみません、喋つてたものですからーー！」

その上その氣は無かつたらしく、不慮の事故。

俺はあかりを跨いだ状態のまま立ち上がり、ベッドから飛び降りて扉に近づき手を掛ける。

ある言葉を吐き捨てる。

「いいか、聞けよ、あつきたり女。

俺以外の男とつるむんじやねえ。お前は俺に目を付けたんだ、今更戻れるとかいう考え持つんじやねえぞー！」

勢いよく扉を開け、誰も残つていなかつたこの階全体に聞こえるほどの大声で。

「俺もお前好きになるからな、それなりの覚悟しとけー！」

振り返ることもなく、逃げ出すペリのスピードでその場を去った。

一緒に帰る予定だったらしいあかは、やはり俺を追いかけることもなくその場に固まっていた。

……俺は、何をしてくるんだろうか。

シンレトニアへの道③（後書き）

人物像がだんだん変わってきてています。
ご了承ください（^ - ^ ;
コメント・アドバイスおねがいします。

“愛します、市原君”

“ありがと。俺も……お前を愛してるよ”

“ずっと、一緒にいてくださいね”

“お前こそやな”

俺とあかりは赤い糸をたどり、やつとここまで来た。

もつ、俺たちは迷うことはないだろ。

互いを信じ、愛し、ずっとこの先もそれは変わらない。

深い、愛情、その名の運命は、自分たちで切り開いてみせる。

何人にも邪魔はさせない。

あかりは俺のもの、俺はあかりのもの。

二人は離れることはない。

ずっと、守り合い続けてゆくんだ。

この先何があるかと、どんな試練が一人を待ち受けているか。

どんな困難だつて絶対乗り越えてみせる。

今、此処に誓おつ。

永遠の……俺たちの深海よりも深い愛は、誰にも負けることはない。

負けはしない。

今この、運命のコングを打ち鳴らそう。

「ぶへつ」

歯の浮くような謫言の数々を述べたのは俺だと勘違いしないで欲しい、京祐である。

折角格好つけてナレーションをしたが、俺の見事なアッパーによつて情けない終わり方をした。

「どこのそんなの覚えたんだよ、京ちゃん」

「ふつ……、ソラとアカリちゃんの様子を見てたら、ふと思いついたんでね。

俺、もしかしあつたら将来ライターさんになれるんじゃねえ?ねえ?」

「アホ京ちゃんだね」

「何おつ」

誰の情報だか何だか知らないが、昨日の放課後の一連は学校中で大変噂になっていた。

おかげで学校に来るのに一苦労したが（主に噂好きの女子たちのせい）、まあなんとかやり過ごしている。

そんな俺だが、当のあかりはほとんどの実はまだ登校していない。俺は比較的早く来る方なのでいなくとも可笑しくはないのだが、そろそろ予鈴の鳴る時刻である。

「アカリちゃんが気になる様子かな?え?」

「の、彼女なんか作りやがって。憎いぜ、つづぶッ」

大して力を込めてないアッパーの連打。お調子者の京祐は「あはは

ー」と笑つてゐるので、それほど痛くはないだらう。

ちなみに言つと、噂を真つ先に嗅ぎ付けた京祐にだけはちやんと事実を告げた。

「つ見えて京祐は良い性格をしてくれてゐる憎めない奴だから、多少のお氣樂振りはナシとして、一応信頼している。

本音を言つてみたところ、普段何も言わない俺だからこそだらう、ついに喜んだ。

…今はふざけて冗談を言つたりしているが。

“ソラがどうとつ本氣で女に惚れ込んだかあー…。よかつたな！”

ここつのは口説は、そり気なく嬉しかつたような氣もする。

なんか、親身で考えてくれてたみたいだつたし。

れてゐや。

俺は昨日、とんでもないことを口走つた覚えがある…いや、正直忘
れたいですけど。

“覚悟しとけよー。”

…………何をだよ（笑）。

思わず自分自身でツツツツミミを入れてやりたい衝動に駆られる。

いやマジド。

それと、あの時のあの行動。

なんで自分から好意を見せゆよつた事をしたんだか、未だに謎である。

人類の本能といつのは末恐ろしいものですね、的な思考開始。

俺は取り返しのつかない恥？をかいたよつた氣がして、いたたまれなくなつてゐるのだが。

「いやあ、それにしてもソラ、意外な方向に走つたね

俺はてつきつお前のことだから、そんな状況冷たくあじらつちやつたのかと思ひながら話聞いてたんだけど。

相当アカリちゃんが好きになつちゃつたんだべ？

え？え？このじのじのじ

とか良いながらこの男は、そもそも普通のよつて必答していく。

俺ってめっちゃ、そういうキャラ性を持っているんだもん。

なんか、沈着冷静？とかいう、眼鏡キャラみたいな。

……いや、じめんなさい自分で言つて氣色悪くなりました。

「京ちゃん。俺、なんか登校拒否したいかも」

「え！ ホームシック！ ？ I want to return my
house-.,ー、助けてえ！！

……みたいな？」

「いや、それってホームシック違うない？ てか俺マジコンじがない
つしょ

「ぶは

「いやこや“ぶは”じゃなくて

「はは。……でも、ガチで噂立まつてつてるよな。

誰だよ、垂れ流してる奴。ソラ最近喧嘩してないだろ？

「高校入つてからはキレイに手え引いてるけどね

俺・ソラは中学校時代、好き勝手やっている連中の一つの一人だった。

別段そういう類に憧れを抱いていたわけではなかつたが、‘なんとなく’、入つていた。

中学2年の時。

そういう年頃な所為だらう、理性は関係なく、否応なしに周りに流される。

馬鹿なことをしているとわかつていても、周りがやつているからやる。

そんなこんなで年上の暴走族グループに属していた。

中学卒業の近づいたある日、この京祐と共に意を決してグループを抜けたのは、俺なりの正義のつもりだったのだろう。

殴つてきた人間たちへの、少しの反省、とか。

とりあえず、それっきり関わつていない。

この1、2年何も起きていなかつたんだ、今更恨みを買つこともないはずだ。

「まあ、何かあつたらすぐ相談しろよ、ソーチャン」

「ちやん付け要らない。ありがと」

その時刻丁度に、廊下にチャイムが鳴り響いた。

机に足を乗せたまま、いつもあかりが座りに来る後ろの男子の席を見る。

『こいつ……今日欠席か？』

ふと、本鈴の鳴っているのを聞きながら、校庭を猛スピードで走っている黒い物体を見つけた。

『……何あれ、ボディーガードさん？ 黒服？ 熊？』

いや、違う。

黒く見えるのは残像だ。

アレが俊敏^{しゅんびん}に駆けているだけだ！

見極める、俺！！

……見極めました。

……パンが見えました。

「……遅刻のお約束！？」

クールなキャラで通してきた俺が突然叫んだものだから、当然教室中の奴らは全員俺を見つめた。

だが俺はそんなことはどうでもよく、外の人影に視線を向け続ける。

あかりが、例によつて、調理していない生（？）の食パンをくわえた状態で走つている。

堪えきれず笑つてしまつ。

「ふつ

隣の席にいる女子が、驚いたような顔で俺を見つめていた。

（後書き）庵（ひがし）

「メント・アドバイスおねがいします。」

激闘してみました。

「ふつ…ふええつ……、お、遅れてすみません…」

教室の後ろの扉が開いたと思つて、時間がないにも関わらず三つ編みを結つているあかりが入ってきた。

担任の田村は「最近は遅刻しないと思つていたが、珍しいな」と一言。

かさじと教室の隅を歩いているあかりは、噂され始めている所為か、一斉に注目を集めている。

まあ、言つまでもないと思つが一応おう、俺も間違いなく注目を浴びてこる。

今までの比じゃない。あかりが来てから一段と見てくる人数も増えた。

…今更どうしようもなことだが。

俺の席とは少し離れた位置にある自由席に着くと、あかりは一息つき、俺にアイコンタクトをしてきた。

“お、おはよーいわーこます、市原君”

少しあにかんだ笑顔を見せながら、そんなことを言つてゐるんだが、なあと予想する。

いや、多分的中だろ？。

俺は、なんだかプライドもやらな^やくなつた気がして、少し照れながらも

「おはよ

持ち前のよく通る声で挨拶した。

我ながらりよへやつた、俺。

一瞬かなりの驚きを見せたあかりだったが、もつ^つ~~つ~~ある^るひともな^やいと語つたのだろう、

「お、おはよ^いい^いります」

普通に笑顔を添えて、声で返してきたのだった。

この口は（これから何日続くのかは知れないが）、本当に大変だった。

まず一番に、いつも通り連んでいる俺とあかりを盗み見る輩^やが増えた。

それは時に、怒りと憎しみの色を見せ、時には柔らかな微笑を浮か

べて見せた。

あとは、なにやら俺たちの会話を聞いていた、盗聴器やら隠しカメラやらを持ち込む奴も出てきた。

なんともあ、悪趣味な。

家で見よつこも聴こつこも、大した面白味も無いだろ？

そして、文音たちだ。

文音たちは、最近になつて益々ねちつゝい嫌がらせをしてくる。
く

あかりは何の抵抗もしないが、それなりに気分は害しているだろ？

それとなく落ち込み気味なのはその所為だらうか。

「文音たちに何かされてんのか、お前」

「ふえ？」

放課後、清掃中のこと。

あたかも何事もないかのよつと振る舞おつとあるあかりだが、気持ちが垂れ流し。

バレバレなのである。

「はは、嘘くせえー」

「な、何がですか？」

苦笑いしながらそっぽを向いて、柔らかそうなそいつの髪をクシャクシャにしてみる。

なんだ、見たまんま柔らかい髪だつた。

「ひょっと、折角まとめて来てるんですけど」

「はは」

くしゃくしゃくしゃくしゃくしゃ

そんな効果音が聞こえてきたのである、俺はふざけまくついた。

あかりの三つ編みが完璧なまでに崩れた頃、階段の下の方にいた俺たちのもとへ、文音たち一行が現れた。

なんだか、バトルBGMが流れそうな感じの雰囲気である。

まあこ、ポケモンの。

“ //スカートの文音が勝負を仕掛けてきた！ ”

“ //スカートの文音の特性の『香水』で、相手のソラたちの攻撃力がぐ〜んと下がった！ ”

防御力がぐ〜んと下がった！

素早さはぐ〜んと上がった！ ”

その場から逃げ出したいからだといつのは言つまでもないことだろう。

“ 文音は、特性の『フェロモン』を醸^{かも}し出した！ ”

“ しかし、相手のソラたちには効かなかつた！ ”

うん、当たり前だけど。

色香なんて俺に効かないし、あかりは女な訳だし。

なんだか面倒臭いので、この際このままポケモン的な実況をすることにしよう。

“ 文音は、『暴言』を繰り出した！ 「ちょっと、そこのハチ公！ ツラ貸しなー！」 ”

“アカリの『変な反抗』！「そんな変な名前、イヤです！」”

“文音の『挑発』！「ふんつ、ソラがいなきや駄目だつて？」”

“アカリは、『負けん気』を繰り出した！「市原君は関係なく、行く気はありませんからー。」”

“文音の『暴言』！「調子乗つてるね。单刀直入に言つたゞ、ソラはあなたのモノじやないからー。」”

“アカリは、『挑発』した！「いきなり何を言い出すかと思つたら、女性はもつと温厚にしたらどうですか？」”

“文音の『憤慨』！文音は手がつけられない状態になつた！”

“文音は、『闘魂パンチ』を繰り出した！「辽のつ……！」”

文音の技が4つを越えてしまつたので、ナレーションは元の、俺の心の語りへと戻そう。

文音から発せられたそのパンチだが、あかりに当たる「」となく、俺の掌で難なく受け止められてしまつた。

文音は頭に血が昇つたまま叫ぶ。

「ソラー！あんたどうしちゃつたのー！？」

何でこんな、変な女なんかと連んじやつてるのー！？」

あたしだと何が不満だったってのよ、こんな意味深女、捨てぢゃいなさこーー。」

ぱんつ

リアルにそんな音を立てて、そのまま文音は崩れ落ちた。

近くでその様子を見ていた柚木や早紀乃は、ひとつ、と息を呑んだ。

「こつ……。

な……、何すんだよ、ソラ!-痛いじやん!-

俺が、この手で俺が文音を引っ叩いたのだ。

それでも俺は大した罪悪感は芽生えない。

むじろ、叩いてやった相手・文音の罪だと感じていた。

「句とか言になよ、そ」「黙れ文音」

その台詞がいつもの俺と違ったのは自分でも分かった。

文音は俺以上に驚き、怯えたらしく。

少し後退していって居る。

「逃げようなんて構わないけどな。謝れなんてキザな」とも言わねえけど。

ただ……俺、今さ、お前のことがつすつげーむかつくんだよね。

つていうか、虫唾むしつばが走るつていうことなのか、みたいな。

だからさ腰する¹。

文音には、こいつにそんなこと言える権限ないと思ったんだよね。

捨てちやいなって……しかも俺までモノ扱いか。

散々だなオイ

自分でも何が言いたいのか未だに分からない。

自分がダサく思えてきて悲しくなる。

ただ、田の前にこる文音は様子が変わってきていて。

悔しかば悲しがだか、はたまた寂しがだか分からない涙を流している。

震えているのが手にとるよつて分かる。

いや、あくまでも“よつこ”であつて。

実際に手にひとつ分かつたりす「」にけど。

いや、説明する必要ないか。

いや、ただの文章稼ぎですすみません。

なんか「いや」多いな俺。

……でな感じで、涙を流す女に弱い俺は、表情に出すのをいりえながらも心の底では動搖しまくっていた。

なんか、なんだかな。この空気。

激闘してみました。 (後書き)

「メント・アドバイス欲しいです (笑)

『田舎女やばい要素』を垣間見る

わあ、ビリする。

今の俺はちよいと危険な状態だ。

俺の目の前には、先ほどまで泣いていた文音。

そいつが立ち上がり、あらう事が俺にペティナイフの刃先を向けているのだ。

……おい、今の女子高生の間ではペティナイフが流行ってるんですかこの野郎。

俺はまだ死ねないぞ、未練たらたらだぜ。

つてゆうか何故に俺が恨まれるんでしょうか。

俺何もしてませんよね?」
「

あああ何か近づいて来てんですがビリじようか。

とか焦つていてる俺に、文音も一度言葉を投げかけた。

「ソーリン、あたしが中2の時に告つたことは、覚えてるんだよね?」

はい来ましたそういうの。

“ソラ、あたし、あなたのこと好きなのー。”

覚えていいといえば、覚えていなこともない。

中2の時、まだグレていた俺は、せつなく文音の顔面を殴けていた。

周りの女子に比べたら、そりゃあ文音は可愛かった。

いや、ハツキリ言えば『顔が』だが。

目はパツチリしていてアイラインの必要もないくらいだし、

薄い桃色をした潤つていい唇も、それなりに可愛らしい。染めたにも関わらずあまり傷んでいない茶髪も、カラカラして綺麗だと思う。

その頃の俺は、人を外見だけで判断する、自分でも本気でやつつくらい最低な奴だったので、

それだけで文音の顔面を殴ってしまった…だったと思つ

“ だつたと思つ ” と云ひのせ、まあ、色々な糺余曲折があつて。

結局は文音から逃げ回つ、付き合ひのまゝなく卒業を迎えたのであつた。

ああ、俺ってかなり最悪な男じゃねえ？

かくして小早川高校に入学した俺だが、文音も同じじつを希望したらしく、クラスまで一緒になる羽田だ。

俺は多少なり動搖した記憶があるが、中学を卒業してから文音は追つてこなくなり、普通に接せるようになつていた。

それで俺は安心しきつて今日まで過ごしてきたが……

『 あれ、俺の所為なんじやねえ、これ 』

なんとなくせばいだつて思つてきた俺に、文音は続ける。

「 あたしね、ソラの〇〇もひさえ、すつこ幸せだつた。 」

ずっと傍にいてくれるんだつたら、何しても良いくつて思えたの。

薬ヤクだつて、盗みだつて、人殺しだつて。

ソラが望んだなら、いつだつて何でもしてあげよつと思えたの。」

でも……、ソラは違つたんだね。

あたしの一生分の気持ち裏切つて、他の女に走つたんだもんね。

最初からどうでも良かつたの……？

あたしの事なんてまるで考えてなかつたの？

眼中になかつたの？

じゃあ何で〇〇なんて答えたのよ……。

意味わかんないじやん。

イヤだつたなら早く言つてよ。

馬鹿……

あんたなんか……そんなソラなんか、死んじゃえばいいんだよー。」

俺に向けられた刃はそのまま突き進んで来、腹の辺りを叩がけているので、

俺は咄嗟に飛び退いて逃げる。

「待ちな、ソラー!逃げんの!-?」

「そんなん持ってる奴を待つ馬鹿いねえだろ!」

俺は狭い階段の下を必死で逃げ回る。

ときどき、文音のナイフは壁を掠め、その部分は深く傷ついている。

人体であんな傷を受けたら……、たまたまものじゃないだろう。

絶対に御免だ。

「ツのーー!」

ナイフが俺の胸元に飛び込む。

やばいと思ったのも、つかの間。

俺は……。

あれ、生きてる。

「………」

はつとして田の前を見ると、ずっと隅にいた箸のあかりが、ロッカーにしまつてあつた簞を取り出して構えていた。

なんか男の立場ないんじゃねえ、俺？

……そんなこと書つてる場合じやなやうやうだ。

「長崎さん…いい加減、甘つたれるのは止めてください…」

見事にナイフを難^なぎ払つたらしくあかりは、興奮して少し息を切らせていく。

切羽詰まつている状況だからか、あかりの形相は凄まじい。

凄まじいこといつよつ、こつものあぢけなむが消え失せていた。

凛とした顔つきで文音を見据える。

「甘つたれ……？」

文音はその単語に反応するかのよひ、怒りの矛先をあかりへと向けた。

「甘つたれだつて！？誰の所為でソラが変わつたと思つてんの！

あんたの所為なんだり、全部！

あんたが一番消えちまえぱいい存在なんじやん！

文音は顔に青筋のようなものを立て……いや、青筋そのものを立て、

あかりに向かつて突進した。

「あんた、むかつくんだよ！」

見てられなくなつた俺は立ち上がり、文音を止めに入り口とした。

が、そんなことは全く必要ないと言わんばかりに、あかりはスッと前に出て

「やつ……」

箒の棒の部分で受け止めた。

そうだ。……これは、まさにチャンバラだ。

『リアルチャンバラ』』と付けられそうな感じである。

その『短剣』を持った文音と、『長刀』を持ったあかりは対峙し、互いを睨み合っている。

「あんたこない加減、死ねよー！」

大きく短剣、ふざけるのはよやつ、

大きくペティナイフを振りかぶった文音。

あかりは怖じ『うづく』ともなく、また薙ぎ払った。

文音のナイフは勢いよく飛んでいき、壁に突き刺された。

「あつ」

遠くにあるそれを取る暇もなく、やがてあかりに押し倒される。

「なんだよ、どけよー・どけー！」

叫び、喚く文音。

いつの間にか柚木と早紀乃はいなくなっている。流石に『やせ』こと判断し、逃げ出していったのだから。

そんなことを頭の隅っこで考えながら、俺は信じがたい光景を……

言葉を耳にした。

「黙れ最低女！」

ソラ君は私の彼なんだから！

もう一度あんな酷い」と言つてみな、このままこの篠でみぞおち突いて、悶死させてやる……

『田舎やなご郷』を垣間見る（後編）

「メント・アドバイスお願ひします！」

ちよつとしたゴール

わあ、いいで問題だ。

今俺が正直焦っている理由、それは何でしょ？

其の1。

文音が突然俺にナイフを突きつけ襲ってきたこと。

其の2。

あかりが、実は武術（？）が得意であったこと。

其の3。

あかりが俺を「ソラ君」「私の彼」なんて言い出した上、急に敬語を捨てたこと。

「なんとか言つたらどうなの…。」

あかりは文音に跨つたまま怒号を飛ばしている。

もはや淑女の面影は無く、今時の女子高生の本性とやら、そのものの姿である。

俺がびびっている理由は3番だ、分かり切っているだらうが。

「う、うぬやこよー重い。ビナツツツんのが分かんないのー?」

あかりは全く重くなかった筈だが、比較的華奢な文音には重かつた
わやしゃ
らしい。

…それでもあかりの方が軽いと思つナビ。

「そんな言葉が欲しいんじゃない! いいからソラ君に謝りなよ!」

謝るまでは句があつてもどかないからー

なんだか今日のあかりは頑固だ。

なんだかな…かなり庇われてる感。

俺は酷く落ち着いている。なんて薄情なんだか。

「うぬやこつて言つてんでしょうー

「謝りなさいー!」

「おおお前ら、何騒いでるーー。」

丁度その場に、音楽科・小池がやつてきた。

『うわ、』

奴は来るなり、俺を一警して「ふん」と鼻を鳴らした。

「うせえつ

うつかり心の声が漏れる。

いや、別に声に出ても問題ないけど。

「うせえくなー」

ピシャリと返されまた腹が立つたが、小池は何やらやれどいひでむ
ないらしい。

何しろ、あの礼儀正しくて律儀で短所のなさそつな日向あかりが喧嘩をあつ始めてくるのだ。

それも、問題児として田をつたれている長崎文音に尻を乗せて。

それも、すごい形相と氣迫と暴言。

こんなに男勝りで暴君（体罰はしていないらしいが）で教師とは思えない女でも、無理はないだろ？

「おこ、田向ーーとつあえず降つろー。」

あかりは振り向くとせず怒鳴り声のまま

「いやですー謝りせるまで絶対に降つませんー。」

小池の度肝を抜いた。

「いい加減觀念してー。」

「うつせえーーー。」

「お前達ーーー。」

田の前で女共が叫んでいるのを聞き耳が痛くなるが、
それよりも俺には、何故ここまでの醜態をついたのがあかりなの
か…ところが不思議である。

なんか、変な響きだ。

『ソラ君…か』

「言つ速さの問題ぢやない

「失礼します

「遅い

「失礼しまーす

ノックするなり声掛けるなりしろ

「なんだ、市原。

堂々と教室の扉を開けてやると、田村と半べそのあかりがこひらを向いた。

「おい

その後は、しばらくしてから小池が援護を呼び、あかりと文音はそれぞれ連れて行かれ、文音はまだ叱りつけられていたが、

俺はあかりを迎えて担任の田村のところへ向かっていた。

下らない小話は止め、俺はそつまを向きながらあかりに囁く。

「迎えに来てやったよ。

「俺寝たいから、早く帰りたいんだけど」

あかりは、しゅんとして俯く。

田村は何かを察したのか、「もつ帰つて良」こと三つて立ち上がった。

そして教室から出ようとして、去り際に振り返った。

「やつだ、市原。

今回の件では、田向の行動は自「」防衛と「」としておへ。お前は、もつ少し周りへの配慮とかに気をつけておけよ、

最低でも、女に気遣いなんてせなことな

よけいなお世話だ。

田村は微笑を浮かべると、すぐ元真顔に戻つて出て行つた。

「^{クソ}糞田村」

あかりは苦笑いして、田元をこすりて「悪い先生じゃあつませよ」と、元の敬語口調で言つた。

「あ、お前、敬語」

「ふふ」

一応、俺にだつてそれくらい分かつてゐけど。

でもなんか苟立ちますね、仕方ない。

「あの、市原君」

「あ？」

「これまた、呼び方も元に戻つていい。

「あの、私。やつれは出しゃせりた事なんかして、『めんなさい』。

反省はしてるので。

お詫びこと言つてはなんですが、可能な範囲でしたら、その……」

口づける。

なんなんだ、この女は。

「なんだよ、ハッキリ言つて」

「え……と……」

「ううのが無ければ、本当に良いやつなんだが。」

「あの、ですね。」

「こないだの市原君の、告白っさ、う、受け取らせて頂こいつかと……」

あかりは手をモジモジさせながら、せや俯き意味で言つた。

何！？

ちよつとしたゴール（後書き）

コメント・アドバイスお願いします。

俺はしばらく啞然としたまま硬直し、あかりを見つめていた。

あかりは何とかそれに耐えていたが、やはり氣恥ずかしくなつてき
たのか

失礼します！」

逃げ出した。

「いや、待てよ」

語尾に汗マークがつきやうな声色で呼び上めの俺。

自分でもよく分かっていないが、相当焦っているらしい。

レレ市原君が落ち着いてぐたぞ

「いいい市原君だつて焦つてますけどつ」

随分アホな事をしていると思った。

俺とあかりは深呼吸して、その場で座り込み、改めて互いをまじまじと見合つ。

あかりは少し火照ったような顔をしている。

目は泳いでいて、たまに俺と視線が交わされるがすぐに逸れる。

「…あの」

口火を切つたあかりの瞳を見つめる。

「あの、それで、市原君はどう思つてゐんですか」

「あ、えと」

なんで今更口づける。

自分で自分にシッカリを入れたくなる。

やつといふかと、最初に俺にキスしてきたのお前の方だろう。

「……………ここから、順序おかしくねえ？」

「だから何でさうなるんだよつー……」

答える俺、質問に！

「た、確かにそうですが……」

「その上で告つたから、俺

ほとんどの生徒が帰宅し、静まりかえった教室。

空いてくる窓から、柔らかい風が吹き付けてきた。

くすぐつたいよつな、そんな気持ち良さ。

俺は何もかもを考える気がせず、本心のままにあかりに言つた。

「俺もお前のこと好きだよ

そしてそのまま、あかりの細い黒髪に触れる。

流れるように撫で付け、その手は肩に落ち、巻きすべ。

あかりの肩が微かに震えた気もしたが、少し経つとおわまつ、穏やかな鼓動が伝わって来た。

片腕で抱え込んでいる形になる。

それでも、小さなあかりは十分に収まっていた。

『小つセーの』

あかりの頭に顎あいを乗せ、今までにないくらい彼女を愛おしく思つた。

『…あ、いい匂い』

女の首筋からくる独自の匂いは結構好きだ。

香水みたいな、人工っぽい甘つたるいやつとは違つて。

「……市原君……」

あかりに声を掛けられて、ふと我に返つた。

バツと腕を解いて彼女を放し、怪訝そうな顔つきで見やる。

「な、何か？」

「お前、それイライラする」

「ふ、ふえつ！？」

突然ガン飛ばされたからか、あかりは戸惑つている。

「お前のその俺への敬語口調と、俺の呼び方」

この女に妙に気にくわないとこりがあるのはその所為だ。

「俺にはタメ口でここし、『ソラ』って呼んでくれればこいから」

「じ、じゅあ……

これでいいかな、ソラ」

名前を呼ばれたのと同時に、弾かれるように動き出す。

それは先ほどまでの理性を持つたのは違い、もはや本能に従っただけの行動だった。

「きやつ

乱暴にあかりの腕を掴んで壁に押しつけ、押し返そうとしているが構わない。

「や、ソラ……？」

キスしているわけでもなく、襲おうとしているわけでもなく。

俺はあかりの耳元で囁くよつて言つ。

「俺に構つひやつたからには、それなりに自覚持たないとね……？」

体力使い果たしちゃつても知らないから」「

そう悪戯っぽく笑つてやると、あかりはまるみるみるうちに赤面して、俯いた。

俺は右手で左と後頭部をつかみ、あかりの顔を上げさせた。

あかりは察して、まだ顔は赤いけど口を開じた。

なんで、こんなにも愛おしく思えるのだ？

そんなの、俺にだって分からない。

ただ、“なんとなく”運命つてやつもあるのかと。

ほんの少し、そう、ほんの少しだも“いから、そこを信じてみたり。

信じて信じて信じ通したら、きっと何かが見えるかも知れないから。

だから、好きになつたこの女と一緒に“何か”を掴みたい…

理由なんて、そんな簡単なモノで良いと思つた。

「ソラ…」

至近距離にある一人が、徐々に距離を無くしていく。

……と、その時。

扉は、勢いよく開いた。

「お前たち長崎のことで話……つて…、

……何やつてんだ? 一人して

ガラつと扉が開いたと思つと、キヨトンとした田村が立つていた。

俺たちは互いに飛び退いて、冷や汗を垂らしていた。

『『どんだけ絶妙なタイミングで入つてくれんだよー』』

これも、この『お約束ガール』の力（？）であろうか。

俺は、キスすることが出来なかつた所為なのか、

それともこれから先のことが思いやられるからなのか、

どちらだか知れないが、深い深い溜息をついていたのだった。

距離（後書き）

「メント・アドバイス等お願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9531e/>

お約束days

2010年12月9日15時20分発行